



「天気」の100不思議

村松照男 著

東京書籍, 2005年4月, 232頁

1600円 (本体価格)

ISBN 4-487-80056-0

著者は、1977年のGMS1号の打ち上げに立ち会った。その後、予報業務の傍ら、衛星画像の解析によって台風の運動を詳細に研究した。奇しくも、定年直前に気象衛星センターの所長になり、GMS5号の最後を見届け、MTSATの成功を確認して、今年3月に気象庁を定年退官した。日本の衛星気象観測の歴史と共に歩んだ著者であるが、旺盛な好奇心は、気象業務だけでなく、気象に関わるあらゆる事象にアンテナを向け、文学・歴史など、気象と関わる人間社会の事情に精通し、独特の「村松ワールド」を築いた。その内容は、多くの新聞のコラムで紹介されてきたが、本書は、「村松ワールド」の集大成である。

本書の題名は、同じシリーズの他の本と調子を合わせるためのものであるが、同時に、「村松ワールド」の表現するための最適の構成とも思える。すなわち、本書は、100のトピックスを、1テーマ1見開きでまとめるという構成を取っている。著者の新聞コラムになじんだ読者には、違和感のない書き方である。ほとんどのテーマには図が入り、文章も新聞のコラムより長い。さらに、各ページの下には専門用語の解説がある。このような構成は、本書が、気象事典としても、また、専門用語の辞典としても使える体裁になっていることを意味する。それと同時に、本書は、以下の8章から構成されるのである。

第1章 いろいろな天気のお不思議

第2章 天気を測る

第3章 四季の天気のおしくみと異常気象

第4章 雨、雪、曇、光からの贈りもの

第5章 天気予報と気象情報を読む

第6章 地球環境の変化と温暖化の行方

第7章 気象災害の行方

第8章 おもしろ気象コラム

このような章構成は、本書が、気象のいろいろな側面を紹介する解説書としての側面をもっていることを意味する。一般には、辞典と参考書はかなりイメージが異なるものであるが、本書は、その2つの側面を縦糸と横糸のように織り込んだ、かなりアクロバティックなレイアウトになっている。それが、「村松ワールド」の特徴なのである。

最初に述べたように、著者の専門のひとつは、台風であり、本書でも台風に関するテーマがいくつも取り上げられている。台風のめずらしい現象がいろいろ紹介されているが、その多くは、著者自身が発見した現象である。その配置を見ると、「1 台風の目は円くない?」、「2 台風の目は台風の中心ではない?」、「3 台風の目は瞬きをする?」、「4 台風の目と目は引き合う?」は第1章、「36 台風の発生とアジア名」、「37 台風は真水のスーパータンカー」は第3章、「64 台風情報をどう読むか」、「93 現在は大被害台風襲来の危険期間」、「94 日本と世界における気象災害と台風被害」は第7章、「98 奥の細道「佐渡の荒海」の句に台風の影」は第8章と、多くの章に分かれている。同じ台風といっても、さまざまな側面があり、いろいろな切り口で、台風の側面を見たということである。もしも、気象の事典であれば、「台風」という項目をたててしまうところであるが、「村松ワールド」では、そのような無味乾燥なことはしない。気象を全方位的に見る視点の中に、台風の多面性が埋め込まれているという構成を取る。あたかも、キュービズムの画家が、いろいろな方向から見た顔の情報を集めて、独特の顔の絵を描くのと似ている。そこを理解していないと、なぜ、台風のことが離れた場所で繰り返し取り上げられるのか疑問をもつことになる。

本書の特徴のひとつは、取り上げたトピックスのスペクトルが広いということである。基礎的な気象現象の解説から、天気と経済、気候変動と文明の衰退、「川中島の戦い」の際の気象の変化など、著者の関心の広さが散りばめられており、そこが本書の最大の魅力であるともいえる。読み物としても面白く、事典として使うこともできる本書を会員の皆様の座右に置くことをお勧めしたい。(放送大学 木村龍治)